



Title	岩橋型横穴式石室の石材獲得：点紋片岩の分布と石材採取地点の検討から
Author(s)	瀬谷, 今日子
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 505-515
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

岩橋型横穴式石室の石材獲得

—一点紋片岩の分布と石材採取地点の検討から—

瀬谷 今日子

はじめに

和歌山県北部を西流する紀の川下流域南岸には、標高 150 m 前後の岩橋山塊上に約 1000 基の古墳が築造された岩橋千塚古墳群が存在する。岩橋千塚古墳群は、古墳時代前期から終末期の長期にわたり継続し、なかでも 6 世紀前葉には丘陵の主稜線上に大型前方後円墳が連続して築かれ、その周辺に中・小型古墳が爆発的に増加するなど古墳の築造が最も盛行する。この頃導入された横穴式石室は、当該地域固有の石室類型である「岩橋型横穴式石室」として、石室構造や棺を用いない埋葬習俗など隣接する畿内地域とは異なる岩橋千塚古墳群の独自性を表出している。

本稿では、この岩橋型横穴式石室の石室構造を規定する大きな要素と考えられる石室石材について、周辺地質との比較や石材採集地点の抽出を行い、岩橋千塚古墳群とその周辺の古墳における石室石材の獲得について検討を行うものである。

1. 岩橋型横穴式石室の分布

岩橋型横穴式石室は、岩橋千塚古墳群とその周辺に分布する当該地域固有の石室類型で、主な特徴としては、①石材に結晶片岩の割石を使用する②玄門部が内側に突出し玄室前道を備える③玄室前道基石を備える④玄門部及び羨門部を板状の扉石で閉塞する⑤排水溝を備える⑥玄室に石棚・石梁を懸架する場合がある⑦玄室床面に屍床が設置される⑧石棺を納置しない⑨遺骸を石室主軸に直交配置する、ことが挙げられる（図 1）。

岩橋型横穴式石室は、岩橋千塚古墳群において MT15 型式期に初源的



図 1 岩橋型横穴式石室の各部の名称

な構造が出現し、大型前方後円墳が連続して築造される TK10 型式期には典型的な岩橋型が完成する。6 世紀以降、岩橋千塚古墳群では首長墳及び中・小型古墳の主要埋葬施設は横穴式石室となり、そのすべてで岩橋型横穴式石室が採用される。

この岩橋型横穴式石室は、岩橋千塚古墳群周辺の古墳においても採用され、岩橋型横穴式石室出現期の MT15 ～ TK10 型式期には、紀の川下流域北岸の晒山 10 号墳、紀の川下流域南岸の明楽 2 号墳や関戸古墳、亀の川流域の室山古墳群に採用される。岩橋千塚古墳群で県内最大級の前方後円墳である天王塚古墳が築造され岩橋型横穴式石室の完成形が構築される MT85 型式期には、紀の川下流域北岸・南岸、貴志川流域、亀の川流域、有田川流域の古墳においても岩橋型横穴式石室が採用されるなど、岩橋型横穴式石室の分布は最も拡大する（図 5）。

岩橋千塚古墳群で前方後円墳の築造が終了した TK43 型式期以降は分布がやや縮小し、紀の川下流域北岸では畿内系の横穴式石室が、紀の川下流域南岸の寺山古墳群や神田古墳群では穹窿式天井を持つ渡来系の横穴式石室が構築され、同じく紀の川南岸のセツ塚古墳群や具束壺古墳群では岩橋型横穴式石室と類似する構造をもつものの玄門の内側に突出した立柱石を据える横穴式石室が構築されるなど、当該期に新たに出現する古墳の多くは岩橋型横穴式石室以外の横穴式石室を採用するようになる。さらに前段階で岩橋型横穴式石室が採用されていた紀の川南岸の明楽古墳群や小倉古墳群、船戸山古墳群でも典型的な岩橋型横穴式石室の玄門部が玄室前道から玄門立柱石へと変化し、亀の川流域や有田川流域では腰石や玄門立柱石が採用されるなど、各地で典型的な岩橋型横穴式石室から変容した石室が採用されるようになる。その一方で、紀の川下流域北岸の鳴滝 1 号墳、紀の川中流域北岸の八幡塚古墳、竹房古墳、じゅあな塚古墳、亀の川流域の山崎山 1 号墳、吉野川流域の岡峯古墳など、新たに岩橋型横穴式石室を採用する古墳も出現する。

このように、岩橋型横穴式石室の分布範囲は時期毎に変化がみられるものの、北は紀の川下流域北岸、東は吉野川流域の奈良県下市町の岡峯古墳、南は有田川流域の箕島 1 号墳までその分布が確認できる。

なお、岩橋千塚古墳群周辺の古墳における岩橋型横穴式石室は、岩橋千塚古墳群の首長墳に準拠した構造や石室構築技術を有することから（萩野谷 2021 : pp. 296-301）、岩橋千塚古墳群の首長との直接的なつながりにおいて採用されるとみられる。

2. 紀の川下流域の地質—三波川帯における点紋帯と無点紋帯—

岩橋型横穴式石室が分布する紀の川下流域の地質は、紀伊北部を西流する紀の川の北に中央構造線が東西に横断し、これによって地質構造上で北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯に分けられる。紀の川北岸は、西南日本内帯の領家変成帯の西南端で、和泉山脈は堆積岩である

礫岩・砂岩・泥岩の互層をなす和泉層群で構成される。一方、紀の川南岸は西南日本外帯に属する龍門山脈があり、変成岩である結晶片岩を主体とする長瀬変成帯にあたる。龍門山脈は結晶片岩中に貫入した蛇紋岩からなる龍門山（756 m）が主峰となり、西側へ標高を減じながら岩橋山塊まで続く。岩橋山塊は標高 140 ～ 155 m の結晶片岩類で構成される山塊で、この岩橋山塊に岩橋千塚古墳群が所在する。

紀の川南岸の長瀬変成帯は三波川帯と御荷鉾層から構成され、中央構造線に平行して走り、中央構造線に近くなるほど変成度が高くなっていく。変成度が高くなると結晶が粗粒になり、曹長石質斜長石が緑色片岩や石英片岩中にある場合に肉眼的に白い斑点に見える点紋を有する。この点紋に注目すると、三波川帯の結晶片岩類は、中央構造線に近い北側に広がる曹長石斑状変晶の存在が認められる結晶片岩（点紋片岩）からなる点紋帯と、その存在が認められない結晶片岩（無点紋片岩）からなる南側の無点紋帯に分けられ（図 2）、その境界は紀の川下流域では岩橋千塚古墳群が所在する岩橋山塊の南付近に想定される（宮田隆夫ほか 1993）。

3. 紀の川下流域の古墳における石室石材と地質との関係

岩橋型横穴式石室における結晶片岩の板状石材の使用は、石室構造を規定する重要な要素の一つである。したがって岩橋型横穴式石室の石材には須らく結晶片岩が用いられている。

この岩橋型横穴式石室に使用されている結晶片岩は、岩橋千塚古墳群が所在する紀の川下流域南岸の三波川帯に分布しているが、さらに採取地点絞るため、石室石材の結晶片岩中の曹長石（点紋）の有無を目視により観察した⁽¹⁾。

岩橋千塚古墳群内では、古墳群内の 10 地区のうち山東地区を除く、花山地区・大谷山地区・大日山地区・前山 A 地区・前山 B 地区・和佐地区・井辺地区・寺内地区・井辺前山地区の 9 地区において、公開古墳を中心に大型前方後円墳及び中・小型古墳の横穴式石室で石材の観察を実施した。この結果、点紋帯に所在する岩橋千塚古墳群では、大型前方後円墳及び中・小型古墳のうち観察できた全ての古墳において、石室石材に点紋を含む結晶片岩が使用されていることを確認した⁽²⁾。

一方、岩橋千塚古墳群周辺の古墳では、紀の川南岸の点紋帯に所在する船戸山古墳群、小倉古墳群、明楽古墳群では石室石材に点紋を含む結晶片岩（点紋片岩）が使用され、無紋帯に所在する室山古墳群や関戸古墳、箕島 1 号墳では点紋を含まない結晶片岩（無点紋片岩）が石室石材として使用されていることを確認した。このうち、和歌浦周辺に所在し、古墳周辺の地質に顕著なちりめんじわ褶曲による線構造や石英脈が認められる関戸古墳では、石室石材にも同様の特徴が認められることを確認した。また、長瀬変成帯の御荷鉾緑色岩帯に所在する箕島 1 号墳や宮原古墳では御荷鉾緑色岩が使用されていた。このほか、紀の川北岸の和泉層群に所在

する岩橋型横穴式石室は、現状で石材観察が可能な石室がないものの、鳴滝1号墳では発掘調査報告書の記載から石室石材に点紋を含まない結晶片岩（無点紋片岩）が使用されていることが判明した（京都大学文学部考古学研究室編 1967）。

この結果、岩橋型横穴式石室ではいずれも石室石材に結晶片岩が用いられているものの、基本的には点紋帯に所在する古墳では点紋片岩が用いられ、無点紋帯に所在する古墳では無点紋片岩が用いられている状況を確認することができた。さらに、関戸古墳の石材からは、古墳所在地点で確認される地質の特徴と石室使用石材の特徴が一致することも確認することができた⁽³⁾。

つづいて、非岩橋型横穴式石室においても石室石材の観察を行った。この結果、和泉層群に所在する紀の川北岸の園部円山古墳や奥出古墳では和泉砂岩を用いた畿内系横穴式石室が、三波川変成帯中に蛇紋岩が層状に貫入する地点に所在する紀の川南岸の寺山古墳群や神田古墳群では石室石材に蛇紋岩を用いた穹窿式天井をもつ横穴式石室が、御荷鉾緑色岩帯に所在する女良1号墳では御荷鉾緑色岩が石室石材として利用されていることが確認できた。このことから紀の川下流域周辺の古墳では、非岩橋型横穴式石室では主に和泉砂岩や蛇紋岩、緑色岩が石材として利用され、結晶片岩が用いられる場合も部分的であるなど、使用石材と石室型式に相関



- 凡例：●岩橋型横穴式石室：結晶片岩（点紋あり）
 ○岩橋型横穴式石室：結晶片岩（無点紋）※七ツ塚・具足壺は典型的な岩橋型から一部変容あり
 ◎岩橋型横穴式石室：結晶片岩（点紋の有無不明）
 □非岩橋型横穴式石室：和泉砂岩
 ◇非岩橋型横穴式石室：蛇紋岩
 ◆非岩橋型横穴式石室：緑色岩

図2 紀の川下流域における横穴式石室石材と地質の関係

関係が認められることや、非岩橋型横穴式石室においても古墳所在地点の地質と石室石材に明確な相関関係を認められることが指摘できる（図2）。

こうした石室石材と地質の関係から、紀の川下流域周辺の古墳は、それぞれ古墳の所在地点周辺から石材を採取していたこと、そのなかでも岩橋型横穴式石室を備えた古墳においては、点紋片岩と無点紋片岩の使用の差から、同じ結晶片岩を使用していてもその採取地点が異なっていたことがうかがえる。

4. 岩橋千塚古墳群内の石材採取地点の検討

—使用石材の分量と岩盤露出地点の石材の比較—

点紋の有無から、岩橋型横穴式石室の石材は各古墳の所在地周辺で採取されていたとみられ、岩橋千塚古墳群では古墳群が所在する岩橋山塊で石材を採取している可能性が高い。岩橋千塚古墳群における石室石材の採取地点については、昭和39年に西宮克彦が石室石材と古墳群内の地質調査から石材の採取地点を検討し、花山6号墳の石室石材が花山地区山頂部と南斜面の岩石と一致すること、大谷山22号墳の石室石材は大日山地区の地質と類似していること、前山B130号墳及び將軍塚古墳（前山B53号墳）、前山B192号墳の石室石材は岩橋山塊内で確認できること、さらに天井石や石棚等の大型石材はこれと異なり貴志川流域もしくは和歌浦周辺の石材と類似していることを指摘している（西宮1967）。そこで、実際に岩橋山塊内において石材採取が可能であるかを検討するため、岩橋千塚古墳群内の踏査を実施した。

踏査の結果、利用時期は不明であるものの⁽⁴⁾、古墳群内の複数の地点において丘陵が大きく掘り込まれ結晶片岩の岩盤が露出している石切場跡の可能性のある地点を確認することができた（図3）。このうち大規模なものとして前山A地区に所在する前山A46号墳の北側丘陵中腹では、幅20m、高さ10m以上にわたり岩盤が大きく切り取られ露出し、その周囲には石室石材に利用可能なサイズの石材が多数散布していた（図3-①）。このほかに、規模の差はあるものの石切場跡の可能性のある岩盤の露出地点が古墳群内の特定の地点に偏ることなく、各地区においてそれぞれ複数地点存在していた。

岩橋型横穴式石室で使用される石材は、壁面に使用される小型石材と、天井石や石棚、扉石、石梁等に使用される大型石材に分けられる。大谷山4・5・6・27・28号墳・前山B370号墳等の発掘調査成果によると、壁面に使用される小型石材はいずれも概ね幅20cm前後、厚さ10～15cm前後、長さ40～60cm程度であることから、少なくともこの小型石材については古墳群の各所で確認できた岩盤露出地点において採取可能と考えられる。

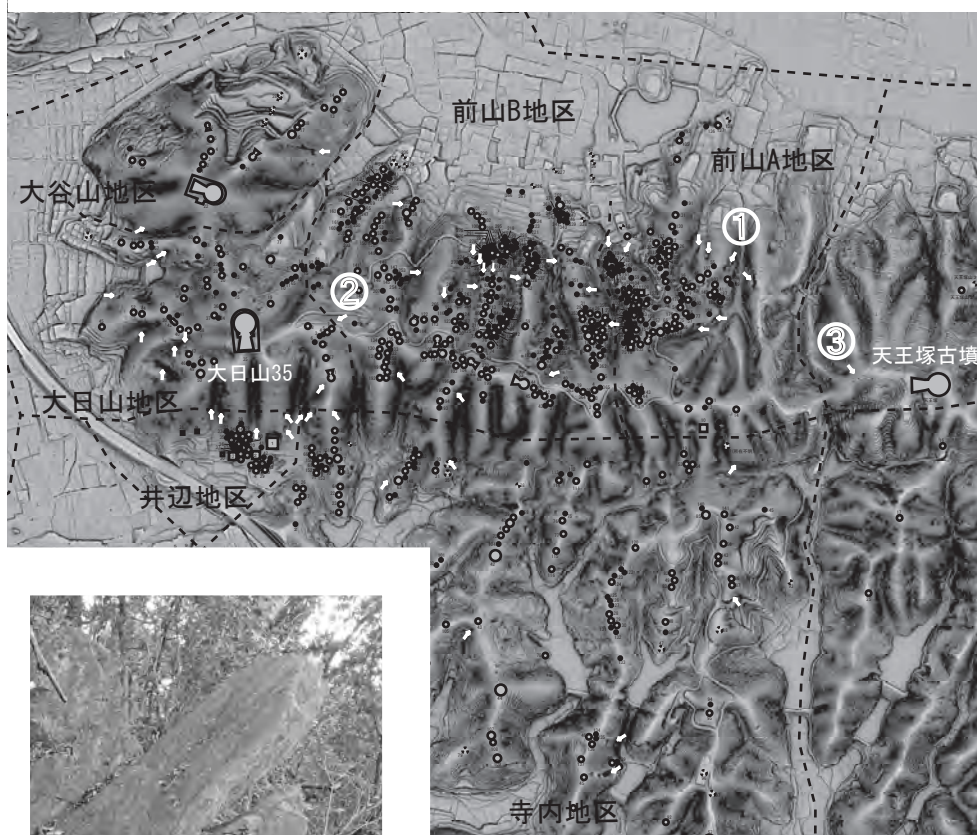
一方、天井石や石棚、扉石、石梁等に使用される大型石材は、岩橋山塊内に少ない緑泥石片岩石材が使用されている例が多く、貴志川流域あるいは和歌浦周辺から石材が運ばれてきた可



①前山A46号墳北側岩盤露出地点



②長持石



③天狗の鼻

➡：石切場の可能性がある岩盤露出地点

赤色立体地図でみる
岩橋千塚古墳群の古墳分布と岩盤露出地点

図3 岩橋千塚古墳群内における岩盤露出地点

能性が指摘されているが（西宮 1967：pp. 314-326）、今回の目視による観察では、小型石材と同様に点紋が確認できる岩橋山塊内で確認できる石材が大型石材においても確認することができた。そこで岩橋山塊内でこうした大型石材が採取可能かについて検討を行った。

県内最大の墳丘規模の大日山 35 号墳が所在する大日山山頂から西に延びる尾根の主稜線付近の平坦面には、その形状から「長持石」と呼称される長さ 4.23 m、幅 1 m 以上、厚さ 1 m 以上の法量を測る大型石材が確認されている（図 3-②）。周辺に古墳が確認されていないことや、天井石や扉石等がこうした大型石材を板状に分割して使用したと考えられることから、石室石材として使用予定であった石材である可能性が高い。この長持石は点紋を有し、周辺で露出している岩盤と岩質が類似していることから、岩橋山塊でこうした大型石材が採取できることが示唆される。

さらに、大日山 35 号墳と並び県内最大規模の墳丘をもつ天王塚古墳が所在する天王塚山山頂から西に延びる尾根線上付近北斜面には、約 15 m 四方にわたり岩盤が露出している地点が確認できる（図 3-③）。この地点では、板状や柱状の複数の石材が地面から突き出るように露出しており、その形状から地元では「天狗の鼻」あるいは「天狗岩」「天狗の腰掛」と呼称されている⁶⁾。柱状に突き出た石の最大のもは、長さ 2.7 m 以上、幅 56 cm を測る。この石材と形状や法量が類似したものが、天王塚古墳の横穴式石室の石梁にみられる。岩橋型横穴式石室では玄室に石梁を架構する事例が 22 基の古墳で確認されるが、石梁に使用される石材は概ね幅 50 ～ 70 cm 前後、厚さ 20 ～ 25 cm 前後、長さ 1 m 以上を測り、基本的には上述の長持石のような大型石材から割り出したとみられる板状の石材が使用されている。ところが、玄室高 5.9 m を測り岩橋型横穴式石室の完成形とされる天王塚古墳では、岩橋型横穴式石室で最大の 8 本の石梁を有し、そのうち 5 本に柱状の石材が使用されている（図 4）。

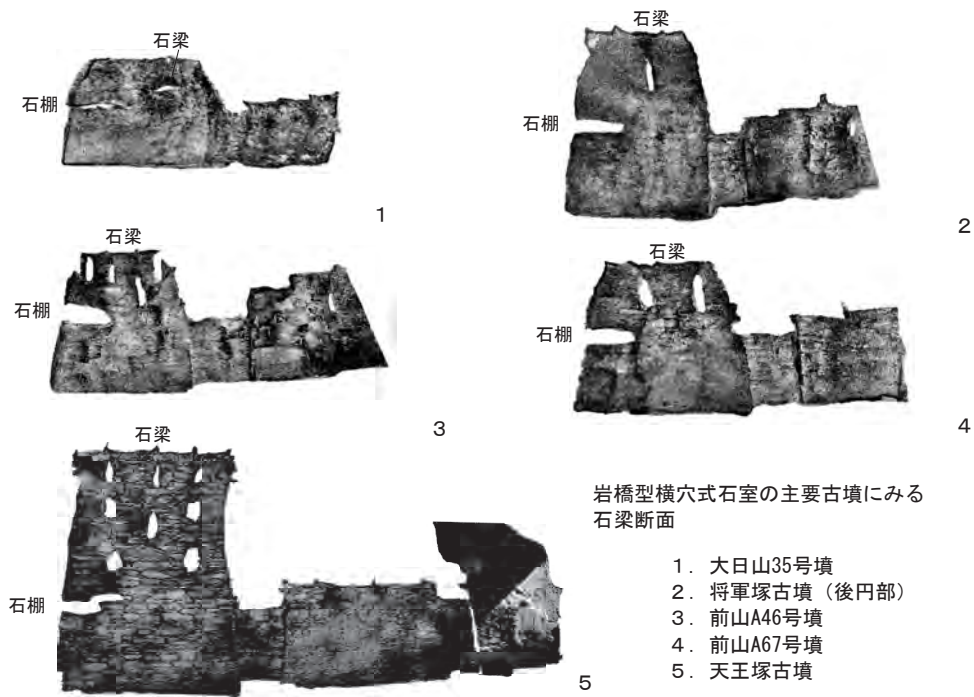
5 本の石梁はいずれも幅 50 ～ 60 cm、厚さ 38 ～ 48 cm、長さ 2 m 以上を測り、法量や形状から天狗の鼻でみられた柱状石材をそのまま用いることが可能である。また、天狗の鼻では露出している石材の形状から大型の板状石材を切り出すことも可能であると考えられる。

このように大型石材は採取可能な地点は限定されるものの、岩橋山塊内においても採取可能であることを確認した。

5. 運ばれた石材と古墳の選地

次に、紀の川下流域で、地質と異なる運ばれた石材を用いた横穴式石室を備えた事例について検討を行う。

晒山 10 号墳（背見山古墳）、雨が谷 2 号墳、鳴滝 1 号墳は、いずれも紀の川北岸の和泉層群上に所在するが、結晶片岩を用いた岩橋型横穴式石室を備える。紀の川下流域では例外的な「わ



岩橋型横穴式石室の主要古墳にみる
石梁断面

- 1. 大日山35号墳
- 2. 將軍塚古墳 (後円部)
- 3. 前山A46号墳
- 4. 前山A67号墳
- 5. 天王塚古墳



石梁に使用された板状石材（1～4）と 柱状石材（5）

岩橋千塚古墳群の主要古墳における石梁の法量と形状

古墳名	石梁				古墳名	石梁			
	本数	幅(cm)	厚み(cm)	石材形状		本数	幅(cm)	厚み(cm)	石材形状
大日山35号墳	1	70	14	板状	前山A67号墳	2	63	17.5	板状
大谷山22号墳	1	52	20	板状			56	21	板状
將軍塚(後円部)	1	70	23	板状			57	20	板状
前山A46号墳	4	58	12	板状	天王塚古墳	8	65	28	板状
		40	20	板状			55	18	板状
		76	18	板状			58	48	柱状
		42	16	板状			52	48	柱状
大谷山16号墳	3	56	21	板状			62	48	柱状
		63	17.5	板状			48	20	柱状
		70	30	板状			54	38	柱状
郡長塚古墳	1	57	21	板状	井辺1号墳	1	58	33	板状

図4 岩橋型横穴式石室の石梁

ざわざ運んだ石材」を用いた石室である。

3基はいずれも近接した位置に所在し、その周辺には平井埴輪窯跡や製塩や牛馬の飼育、鉄器生産を行っていた西庄遺跡などの生産遺跡が所在し、また紀の川河口「紀水門」付近にあり、さらに古代以降南海道が通る水陸の交通の要衝にあたる。

晒山10号墳と雨が谷2号墳に岩橋型横穴式石室採用された6世紀前葉は、平井埴輪窯跡から岩橋千塚古墳群へ埴輪を供給した可能性がある時期である。首長権が紀の川北岸から南岸へと移動した後も、なおも重要な生産拠点であったとみられる。

鳴滝1号墳が築造されたTK43型式期は、『日本書紀』に記載された安閑2年（535年）の経湊屯倉・河辺屯倉の設置後にあたり、中央政権の在地支配強化が明確化する時期である。岩橋千塚古墳群周辺では、前段階まで岩橋型横穴式石室を採用していた範囲で次々と非岩橋型横穴式石室が採用されるが、その外側にあたる鳴滝1号墳や八幡塚古墳などで新たに岩橋型横穴式石室を備えた古墳が築造された。この背景に、岩橋千塚古墳群の首長の在地支配戦略が看取されるだろう。

6. ま と め

以上、岩橋型横穴式石室石材の結晶片岩における点紋の有無と周辺地質との関係、並びに岩橋千塚古墳群内の石切場跡推定地の検討から、岩橋千塚古墳群では古墳群内で石材を採取していた可能性について指摘した。岩橋型横穴式石室は、その構築技術において岩橋千塚古墳群の首長からの直接的な情報提供やつながりが認められる一方で、石材については特定の地点から一元的に採取・運搬しているのではなく、古墳築造地点の周辺の複数地点から個々に採取している可能性が高いことを確認した。また、紀の



図5 岩橋型横穴式石室の時期別分布

川下流域では、すべての横穴式石室の石室石材と古墳所在地点の地質に明確な相関関係が認められ、石室石材獲得や古墳の選地についての傾向を読み取ることができた。それゆえに、例外的にみられた運ばれた石材からは、岩橋千塚古墳群の首長による紀の川下流域における地域支配戦略が看取された。

なお、結晶片岩の石材を利用した埋葬施設は、横穴式石室導入以前の堅穴系埋葬施設にも用いられており、これらが横穴式石室石材と同様の様相を示すかについては今後の課題としたい。

謝 辞

本稿を執筆するにあたり、石材観察にご協力いただいた和歌山県立自然博物館の小泉奈緒子学芸員、天狗の鼻について情報提供いただきました岩橋千塚を守る会の鴨口正紀氏並びに西本健氏、岩橋丘陵における現代の石切場についての情報提供及び現地案内いただきました杉原稔氏には末筆ながら記して御礼申し上げます。

註

- (1) 本来、結晶片岩中の含有鉱物の観察については顕微鏡による石材断面の観察が必要であるが、今回は非破壊の目視観察に留まった。このため表面の風化等により、点紋の有無を観察できない個体も多くあった。
- (2) このうち花山地区・井辺地区・井辺前山地区では、横穴式石室の石材が露出している事例が少なかったため、十分な観察を行うことができていない。一方、大谷山地区と前山B地区の古墳では、特に顕著に石材中に白い斑点が認められた。
- (3) 紀の川中流域北岸の八幡塚古墳で墳丘状に散布していた石室石材の可能性のある石材が、周辺地質にみられる雲母片を多く含む点紋片岩であることを確認した。
- (4) 岩橋山塊においては、果樹園の石垣等に利用するために近年まで、周辺の集落山塊内から石を切り出していることを、杉原稔氏よりご教示を得た。
- (5) 「天狗の鼻」の名称及び所在地点については、鴨口正紀氏及び西本健氏からご教示を得た。

引用・参考文献

- 岩橋 勉 1956「紀伊半島に於ける点紋結晶片岩帯の分布について」『和歌山大学学芸学部紀要 自然科学』和歌山大学学芸学会編：pp. 6-9
- 関西大学文学部考古学研究室編 1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会
- 京都大学文学部考古学研究室編 1967「和歌山市鳴滝古墳群の調査」『和歌山県文化財学術調査報告 第二冊』和歌山県教育委員会：pp. 40-47
- アーバンクボタ編 1999「紀伊半島四万十帯の地質図（25 万分の 1）」『URBAN KUBOTA』No. 38 株式会社クボタ

- 黒石哲夫 2005「紀伊における後期古墳時代の集団関係―岩橋系横穴式石室の展開を中心として―」『待兼山考古学論集』大阪大学考古学研究室：pp. 679-730
- 黒石哲夫 2007「地域別概説 紀伊の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局
- 瀬谷今日子編 2019『令和元年度秋期特別展展示図録 開かれた棺―紀伊の横穴式石室と黄泉の世界―』和歌山県立紀伊風土記の丘
- 瀬谷今日子 2024「紀伊北部の首長―岩橋千塚古墳群とその周辺―」『地域と交流の考古学 日本考古学協会 2024 年度島根大会研究発表資料集』日本考古学協会 2024 年度島根大会実行委員会：pp. 243-253
- 西光慎治 2004「結晶片岩使用古墳研究序説」『明日香村文化財調査研究紀要』第 4 号 明日香村：pp. 32-68
- 西宮克彦 1967「第 3 節 特殊遺物の調査研究 1 岩橋山塊の地質と古墳石材について」『岩橋千塚』関西大学文学部考古学研究室編：pp. 314-326
- 萩野谷正宏 2019「岩橋千塚古墳群における岩橋型石室の展開過程」『古代学研究』219 古代學研究會：pp. 7-22
- 松下 進 1975『改訂版 近畿地方』朝倉書店
- 宮田隆夫・牧本博・寒川旭・市川浩一郎 1993「Ⅲ 三波川結晶片岩類（Ps, Ms, Qs, U）」『和歌山及び尾崎地域の地質』通商産業省工業技術院地質調査所：pp. 9-16
- 和歌山県教育委員会 2004「岩橋千塚古墳群の調査」『和歌山県埋蔵文化財調査年報―平成 14 年度―』：pp. 27-30
- 和歌山県教育委員会 2015『特別史跡岩橋千塚古墳群 発掘調査・保存整備事業報告書 3―大日山 35 号墳・前山 A13 号墳・前山 A58 号墳発掘調査報告書―』
- 和歌山県教育委員会 2017『岩橋千塚古墳群―大谷山 4・5・6・39 号墳 発掘調査報告書―』
- 和歌山県教育委員会 2018『岩橋千塚古墳群―大谷山 27 号墳・28 号墳 発掘調査報告書―』
- 和歌山県教育委員会 2020『特別史跡岩橋千塚古墳群―天王塚古墳 2 次・3 次発掘調査報告書―』
- 和歌山県教育委員会 2024『岩橋千塚古墳群―特別史跡岩橋千塚古墳群第 4 次追加指定事業に伴う発掘調査報告書―』
- 和歌山県史編さん委員会 1983「96 関戸古墳」『和歌山県史 考古資料』和歌山県：pp. 428-429

挿図出典

- 図 1 横穴式石室オルソ画像（和歌山県 2020）を元に筆者作成
- 図 2 「紀伊半島四万十帯の地質図（25 万分の 1）」（アーバンクボタ編 1999）をベースに、筆者作成
- 図 3 岩橋千塚古墳群赤色立体地図（和歌山県 2024）をベースに、筆者作成
- 図 4 筆者作成：1～4 は ZenFoneAR にて筆者撮影、5 は和歌山県 2020 より転載
- 図 5 筆者作成